

看護基礎教育においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の評価

石橋 照子・長島 玲子・梶谷みゆき
高橋恵美子・林 健司・和田 由佳

概 要

看護基礎教育における研究計画書作成演習にラベルワーク技法を用い、研究的取り組みをしている。今回は、研究目的の絞り込みと知見の整理の段階を丁寧に指導するよう心掛け、本方法の成果と課題について明らかにすることを目的とした。本方法の履修学生と担当教員に、自由記述による感想・意見を求め、KJ法により分析した。その結果、〈学生に求める要件〉として5つ、〈教員に求める要件〉として6つ、〈学びを促進する方法の要件〉として5つの要件を抽出できた。そして、〈本方法の利点〉として10、〈本方法の成果〉として5つの成果を明らかにすることができた。

キーワード：ラベルワーク技法，教育方法，看護研究計画書，看護基礎教育

I. はじめに

研究の善し悪しに大きく作用する研究計画書の立案には困難さを伴い、その指導にも苦慮する。看護研究計画書の指導方法について検討し、一定の効果が得られたとの報告（不破，2005，松田，2003）はあるが、いずれも研究実施者により立案された研究計画書に対して指導する方法であった。

研究計画書作成過程そのものへの工夫により、研究実施者が自分たちの力で、より完成度の高い研究計画書を作成できることが望ましいが、研究計画書の作成過程への指導方法について検討した報告としては、研究計画書の指導過程に「問題の構造化」演習とグループ討議法を導入し、その効果を明らかにしたものが1件みられたのみであり（花田，2001），開発・検討が必要な領域であると考えられる。

筆者らが考案した「ラベルワーク技法を用いた研究計画書作成方法」は、指導者の下に一度体験すれば、手順書に従い研究実施者が自分たちで研究計画書を作成できると考えられ、研究

活動を初めてまもない看護者や看護学生の看護研究計画書作成における困難さに対して解決のための一方法を提供することができると考えている。

このような考えにより2年前から看護師や看護学生を対象に、看護研究計画書作成の演習をする際に、ラベルワーク技法を用いた方法を開発し実践している。本方法について、動機や研究目的・方法を明確にしていく過程で、思考の整理やメンバー間での共有がしやすいとの評価を得ている（石橋，2006，梶谷，2007）。また、前述の研究報告において、更なる改善点として、研究目的の絞り込みの段階や文献検索ならびに知見の整理の段階における学習支援の強化が必要であると考察できた。

そこで、今回は研究目的の絞り込みの段階と文献検索ならびに知見の整理の段階をこれまでより時間をかけ丁寧に指導するよう配慮を加え、看護学生の看護研究計画書作成の演習において実施し、その成果と課題について明らかにすることを目的とした。

II. ラベルワーク技法を用いた 看護研究計画書作成方法の 概要及び進め方

ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の概要を表1に示す。演習開始前の研究者間での打ち合わせにおいて、昨年の反省を踏まえ、今年度は文献検索ならびに知見の整理の段階をこれまでより時間をかけ丁寧に指導することとした。また、合同で実施する日程のみを設定し、後は各グループの進捗状況により柔軟に時間設定するように配慮した。

III. 研究方法

1. 参加者

3年課程の看護学校3年次生で、研究メンバーの看護研究の演習履修者28名のうち、研究協力の説明を受けた後、同意が得られた学生8名の参加があった。

また、今回の演習においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法を実施した教員4名も参加対象として加えた。

2. データ収集方法

研究参加者に対して、以下の質問項目により自由記述を求めた。質問項目は、①研究計画書作成方法の理解について、②ラベルワーク技法

について、③教員の指導について、④本方法の活用性について、⑤構想発表会について、⑥満足感について、⑦よりよくしていくための方法について問うた。

3. データ分析方法

データの分析にはKJ法を用いた。KJ法は、問題解決手法の中でも質的データの統合と分析に優れた方法であり、学生および教員の自由記述データを丁寧に分析するのに適していると考えたからである。

以下に、KJ法による分析を進めたステップを説明する。

1) データの単位化

記述された意見・感想を、すべて一文もしくは一義単位でカードにした。

2) データの統合化

すべてのカードを研究メンバーに等分に分配し、1枚ずつ順に読み上げながらメンバーの合意の元に、データが主張する内容の「類似性」に着目して、カードを集めグループ化していった。丁寧に分析する目的で、カード枚数は3枚までを基準とし、多くても4～5枚まででグループを作るようにした。それぞれのグループの内容を表す一文を考え「表札」として記述した。

すべてのカードをグループ化し「表札」をつけた後、さらにグループ化を進め、統合できたグループには新たに「表札」をつけていった。

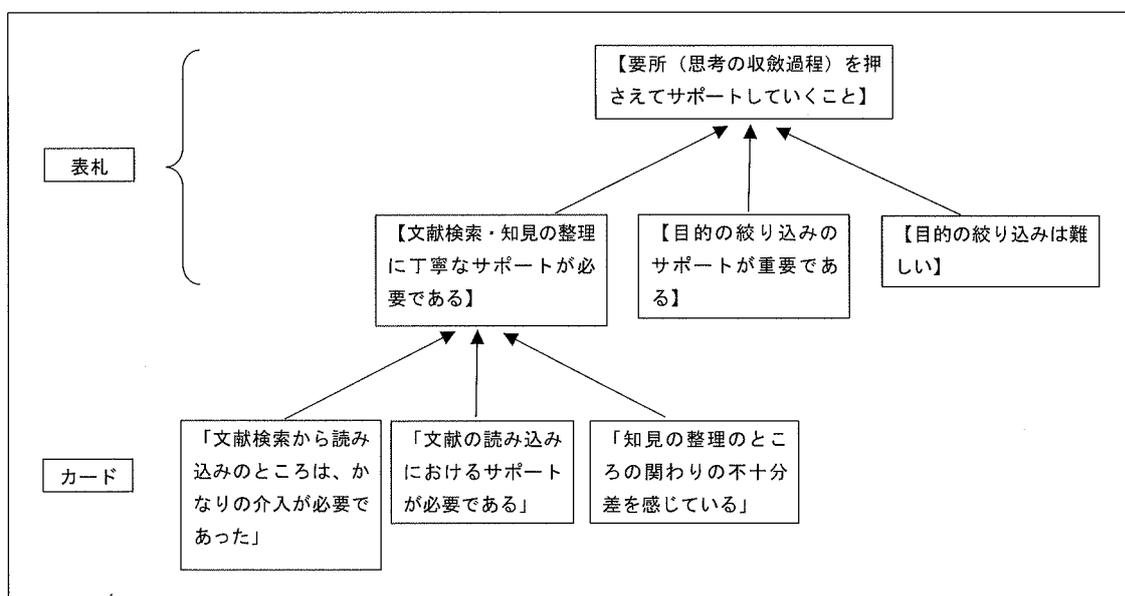


図1 データの結合化の例

看護基礎教育においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の評価

表1 ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の概要および進め方

項目	演習内容	教員の指導
疑問の陳述	<p>臨地実習経験の中で、①繰り返し問題が起こる状況、②期待した成果が得られない場合、③自分の看護行為を批判的視点から検証した場合などに思い当たる疑問を考え疑問ラベルに書く。</p> <p>あるいは文献を読んで、報告された研究結果に矛盾やギャップを感じた場合、研究結果の中で報告されていない部分で関心を持った場合などに矛盾や疑問を感じた点は何か、どんなことが気になったのか疑問点を明らかにし、疑問ラベルに書く。</p>	<p>疑問が浮かばない学生に対して、具体例を示しながら問題意識を持って実習場面を振り返ることを促す。もしくは、批判的に文献講読を勧める。</p>
ステップ1 疑問の選択	<p>メンバーの疑問ラベルを聞き、同じように感じた経験があるか、強く興味・関心を抱いたか等、自分に問いかけ誰の疑問を精選してみるか話し合い決める。</p> <p>疑問を精選した過程を説明文で書く。</p>	<p>教員はファシリテーターとしてグループワークに入り、一つひとつの疑問ラベルを大切に扱い、話し合いを進める。</p>
問題の陳述	<p>選択した疑問について、どんな因子が関与しているか思いつく限り因子ラベルとして書き出す。</p> <p>書き出した因子ラベルをカテゴリー化・構造化し、自分たちが明らかにしたい部分はどのあたりか明確にし、グループで共有する。</p>	<p>いわゆる概念図の作成であり、次に進みたがる学生を引き留め、丁寧にカテゴリー化するよう配慮する。</p>
キーワード・類語の抽出	<p>その問題を解決するのに重要と思われる語を抽出し、辞書等を使って定義を確認する。メンバー間で共通理解すると共に類語を抽出する。</p>	
文献検索	<p>抽出したキーワード、類語を用い文献検索をする。</p> <p>タイトルや要旨などを読み、問題に関連あると思われる文献を選定し入手する。</p> <p>入手した文献に番号を振り、メンバーで分担する。</p> <p>文献を熟読した上で、文献ラベルを書く。</p>	<p>要点がつかめず、やたら詳しく文献ラベルを書く学生がいる。できれば1~2件一緒に文献講読し、ラベルに書いてみる等の工夫をする。</p>
ステップ2 知見の整理	<p>一人ずつ文献ラベルを読んだ上で、補足説明をしたり、質問に答えるなどして、メンバー間で文献を共有する。</p> <p>類似性により文献ラベルをカテゴリー化し、ラベル群の内容を表す看板をつける。</p> <p>模造紙の「問題の陳述」の上部に、文献ラベルを整理して配置する。</p> <p>文献を概観し、陳述した問題に対して主にどのようなことが明らかにされているのか要約する。</p> <p>図解を見ながら、研究課題に対して、どのあたりが明らかになっていて、どのあたりが明らかにされていないか確認をする。</p>	<p>概念図との関係を考慮しながら、既知と未知を整理させ、自分たちが明らかにしようとする範囲や位置づけを確認できるようにする。文献数や学生の共有に程度により、時間配分を考え明確になるまで行うようにする。</p>
ステップ3 研究目的・方法の陳述	<p>陳述した問題について、未知の部分であることを確認し、研究目的をラベルに記入する。</p> <p>話し合い、1枚の目的ラベルを選択する。それについて以下の点について検討する。</p> <p>①明らかにしようとする問題の意義(看護研究になりうるか)はあるか。</p> <p>②効果(明らかにするとどんなメリットがあるか)はあるか。</p> <p>③研究可能性(正確に定義したり、測定が可能か)はあるか。</p> <p>④実行可能性(自己の能力に見合っているか、時間的に可能か、費用はどうか、倫理的に可能か、対象はいるか)はあるか。</p> <p>①~④について検討し確認できれば、検討したこととどんな対象でどんな方法で行うか、説明文として書く。検討した結果目的の陳述を変更した方がよいと判断できた場合は、新ラベルに記述する。</p> <p>選択した研究目的・方法を一番上に書く。</p>	<p>研究目的を明らかにするための対象や方法について話し合う。併せて対象の選択方法や倫理的配慮についても考えながら対象を選定できるよう指導する。</p>
ステップ4 研究計画書案作成	<p>図解に記載してあることを元に、研究計画書案を作成する。具体的には以下の項目について記述する。</p> <p>題目、研究メンバー、問題を陳述し、その問題の重要性を述べる。最終的に研究の目的を述べる。</p> <p>関連文献についての簡潔に論考し、研究の独創的な点、意義について述べる。</p> <p>具体的に対象、調査方法、分析方法、倫理的配慮について述べる。</p> <p>予算を算出し記述する。</p> <p>公表の予定を決め、作業計画を立て記述する。</p>	<p>図解のどの部分が計画書のどこに対応しているか、学生に分かるように説明する。</p>
ステップ5 発表会・意見交換	<p>研究計画書案を印刷し、発表会参加者に配布する。</p> <p>各グループが図解を用いながら自分たちの疑問をどのように発展させ精選し研究目的に至ったのか発表する。迷っている点等あれば検討して欲しいこととして提案する。</p> <p>参加者は、発表を聞き疑問点やよいと思った点について意見を述べたり、よりよい方法について提案する。また、発表者から提案された検討事項について意見を述べる。</p>	<p>発表会企画・運営を学生に担当させる。事前に発表時間や意見交換時間を設定しておく、限られた時間で効果的な発表ができるようグループで協力させる。</p>
研究計画書修正	<p>発表会のコメントを受け、メンバーで話し合い修正をして研究計画書を完成させる。</p>	

実際に生成したグループを例として図1に示し説明する。カード内容を「 」で、表札内容を【 】で表している。

まず「文献検索から読み込みのところは、かなりの介入が必要であった」「文献の読み込みにおけるサポートが必要である」「知見の整理のところの関わりの不十分差を感じている」というカードを同じグループにした。これらのカードは、文献検索をし、それを読み込んでいくプロセスが、ポイントを押さえて知見を絞り込まなければならない難易度の高い作業であり、丁寧なサポートが必要であることを意味しており、【文献検索・知見の整理に丁寧なサポートが必要である】と表札をつけた。

次に、【文献検索・知見の整理に丁寧なサポートが必要である】【目的の絞り込みのサポートが重要である】【目的の絞り込みは難しい】の表札を同じグループにした。これらの表札は、知見や思考を絞り込んでいく過程は、内容を明確に把握できていなければ的を射た収斂はできず、教員のサポートが重要であり、且つ難しいことを表しており、【要所（思考の収斂過程）を押さえてサポートしていくこと】と表札をつけた。

3) データの構造化

『看護基礎教育においてラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の成果と課題は?』というテーマで、「表札」間の「類似性」と「関係性」を考えながら、「表札」を模造紙の上に空間配置していった。

4. 倫理的配慮

- ・研究目的と研究方法，研究協力に伴う利益と不利益，自由意思の尊重，プライバシーの保護，データの目的外使用をしないこと，研究結果の公表に関することを研究協力依頼書に示し，文面と口頭説明によって研究参加者に説明する。
- ・質問紙の回収は回収箱を用いて自主提出とし，質問紙の投函をもって研究協力への同意とする。
- ・研究参加者が本学学生であり，研究協力の有無が成績には一切関係しないことを説明し，学生の自由意思が確保できるように配慮をする。

- ・記述データは，番号を振りUSBメモリに入力した後は鍵のかかる場所に保管し，必要時確認できるように保存する。結果を論文等にまとめた後，破棄する。

IV. 結 果

1) データの単位化

学生からのカードは56枚，教員からのカードは42枚抽出でき，併せて98枚のカードを用いて分析した。

2) データの統合化

98枚のカードは42のグループに分かれ，さらにグループ化を進め，22のグループに集約できた。

3) データの構造化

最終的に22のグループは，5つのカテゴリーに集約でき，図2のように表すことができた。

4) 構造の叙述化

分析の結果である図2の全体的な流れについて，カード内容，表札内容およびカテゴリー名を用いて説明する。なお，カード内容は「 」，表札内容は【 】，カテゴリー名は〈 〉を用いて表した。

図2は，〈教員に求める要件〉〈学生に求める要件〉〈学びを促進する方法の要件〉に支えられ，〈本方法の利点〉が発揮されると，〈本方法の成果〉が高まっていくことを示している。

集約できた成果と課題について，カテゴリー毎に説明する。

〈教員に求める要件〉

学生の参画力を高めるためには，【グループメンバーとしての責任を果たしつつ学ぶ楽しさを伝えること】が重要であり，教員には【学生のやる気を引き出すコーチング力が必要である】と実感していた。学生のやる気を引き出すコーチング法として，学生の実践してみたい気持ちを触発しつつ，教員自身が教えながら楽しむことが効果的であった。

具体的な関わりのコツとしては，【タイムリーにアドバイスしていくこと】【留まって話し合いが必要な時を見極めること】【要所（思考の収斂過程）を押さえてサポートしていくこと】が抽出でき，このような関わりができるために

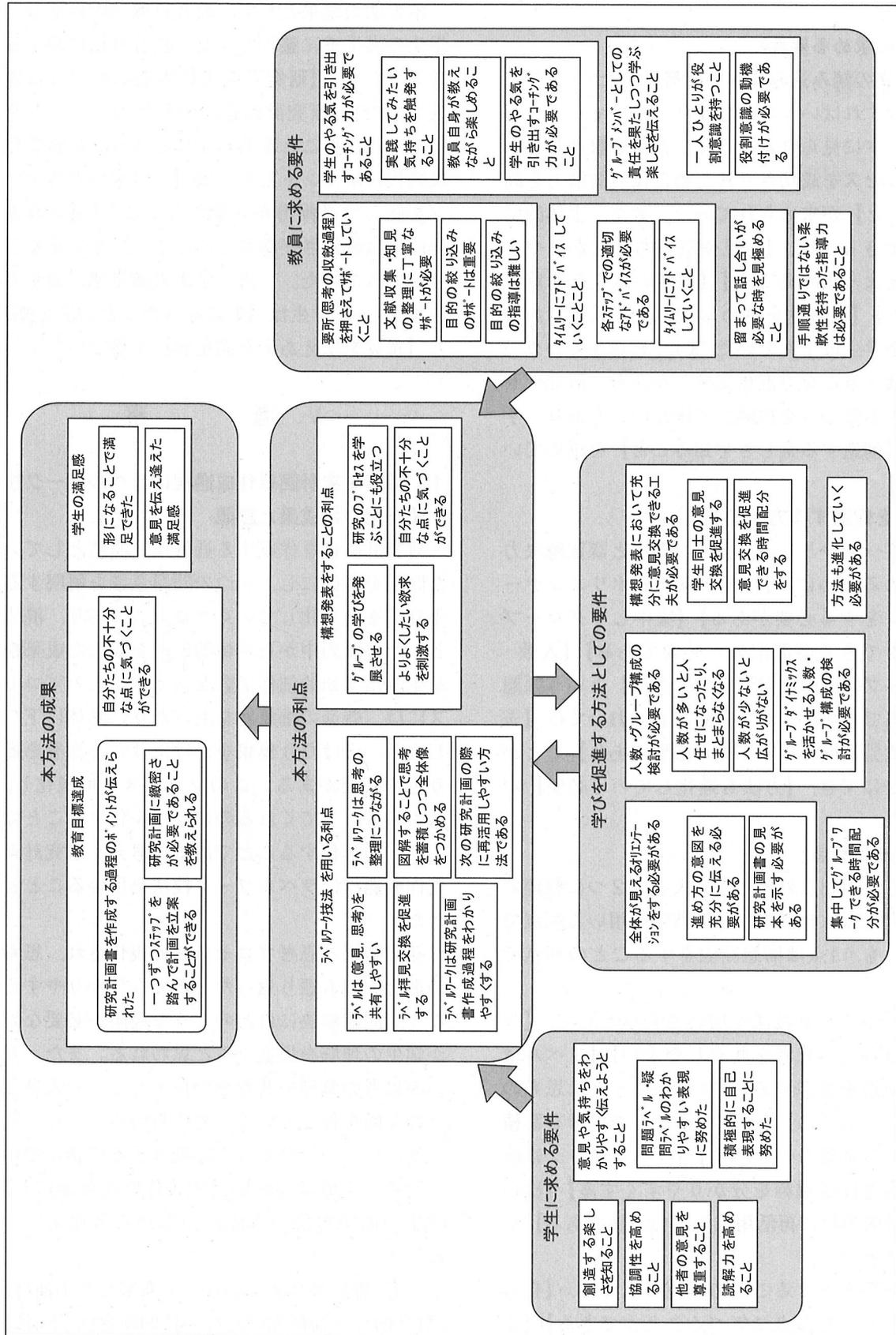


図2 ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の成果と課題

は、研究の進め方の基本を理解した上で【柔軟性を持った援助が必要である】ことを明らかにできた。

〈学生に求める要件〉

「論文の読み込みにおいて努力した」「どこまで要約すればいいのか分かりにくかった」などのカードに見られるように、知見を整理していくプロセスを成功させるためには【読解力を高めること】が求められていた。また、主体的に参画できるよう、【意見や気持ちを分かりやすく伝えようとする】こと【他者の意見を尊重すること】【協調性を高めること】が大切であることを学生は学んでいた。また、教員からのカードには「みんなで意見交換しながら、研究デザインする楽しさを体験して欲しい」とあり、学生に【創造する楽しさを知ること】を求めている。

〈学びを促進する方法の要件〉

学生一人ひとりの主体的な関与と課題解決力を高めるために、【全体が見えるオリエンテーションをする必要がある】【集中してグループワークできる時間配分が必要である】【人数・グループ構成の検討が必要である】という課題が抽出できた。また、構想発表においては【十分に意見交換できる工夫が必要である】ことが明らかにでき、【方法も進化していく必要】があった。

〈本方法の利点〉

本方法の利点のとして、大きく2つに整理できた。1点はラベルワーク技法を用いる利点であり、もう1点は構想発表をすることの利点である。

ラベルワーク技法を用いる利点として、【ラベルは意見・思考を共有しやすい】【ラベルは意見交換を促進する】【ラベルワークは思考の整理につながる】【図解することで思考を蓄積しつつ全体像をつかめる】【ラベルワークは研究計画書作成過程を分かりやすくする】【次の研究計画の際に再活用しやすい方法である】が抽出できた。

構想発表をすることの利点としては、【自分たちの不十分な点に気づくことができる】【よりよくしたい欲求を刺激する】【発表会はグループの学びを発展させる】【発表会は研究のプロ

セスを学ぶことにも役立つ】が抽出できた。

〈本方法の成果〉

本方法の成果として、教育目標達成の部分と学生の満足感に整理できた。教育目標に関する成果として、【研究計画書作成過程の理解は達成できた】【研究計画書作成過程のポイントを伝えられた】ことを明らかにできた。計画書作成過程のポイントとしては【一つずつのステップを踏んで計画書が立案できること】【計画書作成には緻密さが必要であること】を伝えることができていた。一方、学生の満足感に関する成果として、学生は【形になったことの満足感】と【意見を伝えあえた満足感】を得ていた。

V. 考 察

1. 看護研究計画書作成過程にラベルワーク技法を用いた成果と課題

研究計画書を作成する過程は、漠然としていた問題を明確にし、一つの問題意識を解明する手立てを具現化していくプロセスであり、混沌とした現象の中から具体的に形を成した成果物を生み出す知的創作活動と言える。このプロセスには、概念の抽象度を上げたり、具体的に下ろしたり、広げたり集束をかけたりする作業を繰り返す必要がある。このプロセスを可視化し、スムーズにしてくれるのがラベル化することであり、図解化することであると考える、研究計画書作成過程にラベルワーク技法を用いることとした。

その結果、思考プロセスが可視化され、思考の進行中でも振り返ったときでも分かりやすくなり、問題解決にはどのような段階が必要なのか学生の理解を促進すると思われる。また、互いの思考の整理や共有をたやすくし、一人ひとりの参画を促していくと考えられる。

更には、一つひとつの段階を丁寧に踏んでいくため、完成度の高い計画書作成を可能にし、学生の問題解決力育成につながると捉えている。

一方、質的統合法(KJ法)を考案した山浦は、「科学的な質的研究のための質的統合法(KJ法)と考察法の理論と技術」(山浦, 2008)において、次のような提案をしている。質的研究の問題意

識発掘と文献調査の段階には、質的統合法（KJ法）を用い、研究テーマの設定、研究フィールド・対象・研究内容設計の段階には、仮説発想法・アイデア発想法（コスモス法）を用いることを提案している。

筆者等の提案は、研究計画書作成過程の各段階にラベルワーク技法という問題解決の手法を用いる提案であり、山浦は質的研究の企画から実施までの全ての段階において、KJ法もしくはコスモス法という問題解決の手法を用いる提案であった。ラベルワーク技法とKJ法の違いについて、取り扱うカードの量や分析ステップの複雑さに違いがあるだけで、いずれの方法も質的データの統合と分析に優れた方法であると理解している。このことから、研究計画の過程にラベルワーク技法やKJ法を用いることは思考整理に効果的な方法であると考えられた。

次に、「研究計画書作成のプロセスを理解できた」「計画書の作成過程としてラベルワークは分かりやすい」という意見がある一方で、少数ではあるが「ラベルワーク技法を用いた本方法について、ラベルの必要性が今一つ分からない」「計画書と縮小図解が対応していない部分もあり、分かりにくいところがあった」という意見もみられた。研究計画書作成過程全体も各段階で用いたラベルワークの過程も問題解決過程であり、いわば二重構造の展開と言える。

これは、研究計画書作成過程自体がそのような仕組みになっているためであり、ラベルワーク技法を取り入れたからではない。しかし、ラベルワーク技法を取り入れ一つひとつの段階を丁寧に展開したことにより、ラベルワークの手法に不慣れな場合には、返って研究計画書作成過程の全体が見えにくくなった可能性が考えられる。より効果的に進めていくためには、もっと早い段階からラベルワーク技法を用いたグループワークなどを授業の中に取り入れ、問題解決力を高めておくことや、全体像が見えるようなオリエンテーションの工夫をしていきたいと考える。

2. 指導方法の成果と課題

今回は、研究目的の絞り込みの段階と文献検索ならびに知見の整理の段階を丁寧に指導することを心がけた。その結果、教員の指導に関し

て、学生は「適宜コメントをもらえてよかった」「教員はとても熱心で協力的だった」と、よい評価をしていた。

しかし、更なる向上を目指す上では、日頃から学生の解釈力や要約力を高めておく関わりや、グループの状況に応じて柔軟に対応できるように教員が本方法を熟知しておくことが必要と思われる。そして、学生のやる気を引き出し、課題探求の面白さが伝えられるようなコミットメントの力を高めていきたいと考える。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、看護基礎教育において、ラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成方法の成果と課題について明らかにした。その結果、本方法を用いることで、研究計画書作成過程の思考プロセスが可視化され、思考の整理・共有・理解をたやすくし、一人ひとりの参画を促していくことを明らかにできた。しかし、本研究のデータは限られた研究参加者を対象に、1施設内のみでのデータ収集であったため、その点で実証性の弱さは否定できない。今後さらに同様の機会を得て、同様の基準により感想データを収集すると共に、その結果を統計的な手法で検証していきたいと考える。

引用文献

- 石橋照子, 吾郷美奈恵, 梶谷みゆき, 武智佳子, 高野美喜子, 稲本夏江, 松原峰子, 川原仁美, 三原記子, 山崎祝代, 野津早苗, 児玉美由紀 (2006): ラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法, 鳥根県立看護短期大学紀要, 12, 19-27.
- 梶谷みゆき, 石橋照子, 長島玲子, 高橋恵美子, 林健司, 飯塚桃子, 井上千晶, 渡部真紀 (2007): 看護基礎教育におけるラベルワーク技法を用いた看護研究計画書作成の取り組み, 鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス, 研究紀要, 1, 83-92.
- 不破幸子, 井野つばみ, 平野丸子, 森田良子, 山口桂子 (2005): 看護研究計画書の指導の検討, 第36回日本看護学会 (看護管理),

178-180.

松田裕美子, 白木初美 (2003) : 看護研究計画書がその後の研究指導に及ぼす効果－研究計画書評価と論文評価を比較して－, 第34回日本看護学会 (看護管理), 228-230.
花田郁枝 (2001) : 看護研究計画書の効果的な

指導－「問題の構造化」演習とグループ討議制を取り入れて－, 第32回日本看護学会 (看護管理), 234-236.

山浦晴男 (2008) : 科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術, 看護研究, 41 (1), 11-32.

The Evaluation of the Method for Designing Nursing Research Using the Label Work Technique in the Basic Nursing Education

Teruko ISHIBASHI, Reiko NAGASHIMA, Miyuki KAJITANI, Emiko TAKAHASHI,
Kenji HAYASHI and Yuka WADA

Key Words and Phrases : label work technique, education technique,
designing nursing research, basic nursing education

